銃後の生活

寺谷　美喜子
中央五丁目

今も昔も（その一）

物資がだんだん底をついてきた頃、町会の役員とやらが廻って来た。

塀をとり除く、これはいざという時に延焼を防ぐのと、避難の際に楽なよう。もっともと納得出来た。しかし、玄関上の屋根の下、化粧丸太に傷まぬよう赤銅で先をキャップ（？）してあったのを、供出のため取り外せという。ほんの数個である。当時、貴金属は元より、鉄製の火鉢、火箸から、末は蚊張の取手まで素直に供出した時代である。偉そうに命令された。高い所の物をとり外すといっても男手のなくなったその頃、どうやって外したらいいか。しかし、従わねば非国民といわれるのが辛さに何でもハイハイであった。誰かに頼んで外して貰ったと思う。

青梅街道を渡って大分離れた地点の静かな住宅地にたまたま行った時、威張った態度のその人の家があった。と、見て驚いた。塀はそのまま、すべて元の形で住んでいた。役員だからといって許されることではない。率先して範をたれるべきではないか。命令した横柄な態度は忘れない。役につくと威張りたくなるのか、いつの世も変わらないものだ。供出したいろいろなものは、すべて役立てたようでもなかったらしい。

今も昔も（その二）

農産物の生産地へ疎開したとて、配給には何の変わりもない。わずかの配給に頼っていた。主食の管理は農業会の人達がやっていたらしいが、不正があったということで、戦後は青年会の若者達に委ねるようになった。

配給の日、以前セーターを編んであげた家で、行かれないので代わりに一緒にとってきてくれぬか、と言われた。こっちは疎開者だから土地の人には弱い。それに家の分はほんのわずかだから、いと安い用であった。

セーターを編んだいきさつは、私が家で編んでいるのを垣間見たらしく、子供のものを作ってくれというのである。白い毛糸を持って来たので、白のセーターに手持ちの赤で刺繍を加え、

可愛らしいのが出来上がった。とても喜んでくれて、代金はというので「日頃お世話になっているからいらない」というと、白米を五合位持ってきたのでとても驚いた。助かるけれど、大変な貴重品だから固辞したが、是非にというので有り難くいただいた次第。

配給の場へいき、順に並んでやっと番がきた。家の分が入るいつもの小袋を渡すと、「こんなに小さい袋か」といい、口いっぱい入れてくれた。配給のお米のわずかしかないのを歎くと、「今度はもっと大きい袋を持ってこい。もっと入れてやる」という。農家の人からみれば小さい小さい二合余りしか入らぬ袋だから気の毒に思ったのであろう。しかも計らずに入れるから驚いた。これも不正のはずである。頼まれたのを出すと「こっちのは?」というので「Kさんに頼まれた」というと、「あんな悪い奴のなんか」と、とても悪く言う。はじめてKさんは農業会の人だったと知った。それであの時に白米をお礼としてくれたのだ。きっと白米も沢山手に入っていたのだろう。

後にさつま芋の配給があった。当時、供出用として農家ではただただ大きくなるだけの水っぽいゴツゴツの「沖縄」というのを作っていた。自家用には「金時」「おいらん」、その他おいしいのを作る。供出の時はまぜて出す。その時もKさんに頼まれたが、先方は大勢なので、乳母車を借りて取りに行った。若者達は私にはおいしい金時をくれ、とても有り難かった。次にKさんのには沖縄ばかりで気の毒に思ったので「小さい子供さん達もいるのだから」といっても聞き入れられず、仕方なく帰って来た。その後のKさんは当分外へ出られなかった。今の厚かましい役人達のことを思うと、ずっと純真だったのかもしれない。

恐らく戦争中に苦労したのは我々庶民だし、ある種の人達は不自由もしていなかったのであろうか。

小さな農業会でもこんなことがあった。